

# 研究主題 「一人一人がわかる喜びを味わい、自ら意欲を持って学ぶ児童の育成」

～算数の習熟度別グループ指導のシステムづくり～

(研究者) 仙台市立黒松小学校  
(発表者) 三 塚 修

## はじめに

本校では「学力保証」を学校の重点目標に掲げ、その実現に向けて「習熟度別グループ指導」を柱とした算数指導をシステム化し、児童の基礎学力の育成に取り組んでいる。

習熟度別指導はともすると「児童に優劣意識を持たせてしまう」といったイメージで捉えられ、積極的に導入されにくい指導形態である。

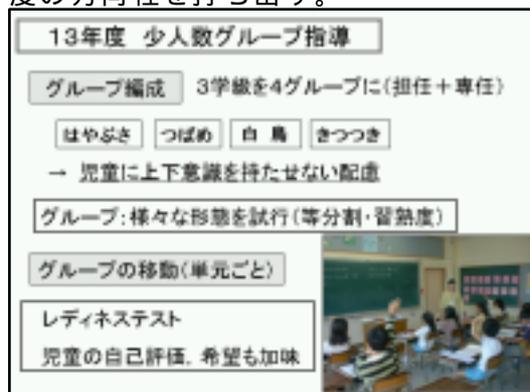
本校においてもその導入にあたっては賛否両論様々な意見が交わされ、学校全体として取り組むまでには1年を要した。

ここでは、習熟度別指導の全校システム化をどのように進めてきたかを報告したい。

## 平成13年度(試行期)

### 1. 13年度基本方針

- (1) 少人数加配教員を有効活用するために、3年生以上において、学級の枠をはずし、担任に加配を加えたグループ指導をする。
- (2) グループの形態は、学年で様々に試行。单元ごとにレディネステスト、児童の希望や自己評価を加味して、その都度グループを編成し直す。
- (3) 7月に中間報告会を実施し、各学年の実施上の課題や問題点について検討する。年度末に全体を通して反省を行い、次年度の方向性を打ち出す。



(図1) 13年度の少人数指導の一例

### 2. 年度末反省で出された問題点

少人数では、どの分け方でも集中力が高まり理解も深まった。しかし、以下の問題も上げられた。

- ・児童が適切なグループを選択できない。
- ・基礎学力の低い子供たちに対して、よりきめ細かな指導が必要である。
- ・グループ内の人数及び学力の差が大きい。
- ・グループ編成に多くの時間がかかる。
- ・評価、情報交換が難しい。

これらの問題点を改善する手立てとして、習熟度別指導を導入しようという声が高まった。

算数部会、職員会議、新年度計画全体会等、話し合いを重ね、平成14年度からは3年生以上の学年で実施する方向を打ち出した。

## 平成14年度(導入期)

### 1. 習熟度別指導実施の基本方針

- (1) 3年以上の学年で、担任に加配2名を加えた習熟度別グループ指導の体制を組む。
- (2) 加配教員の追加配置に伴い、算数の苦手な子のグループをより少人数化する。
- (3) グループは基本的に1年間固定とし、児童の習熟度、日常の学習状況から担任が決定する。7月と12月に見直し、必要な場合は入れ替えを行う。3月には次年度のグループを編成し児童、保護者に通知する。
- (4) 評価は各グループ担当者が行う。
- (5) 児童の実態によっては、特別支援教育と連携し、個別の指導体制を組む。

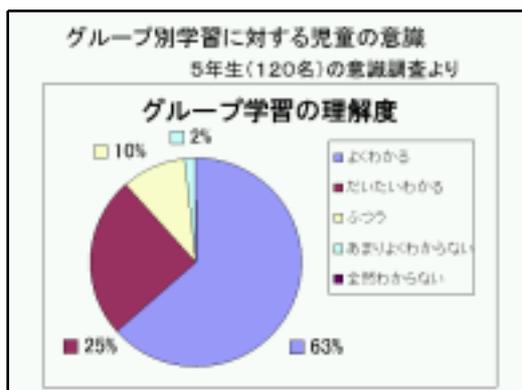
### 2. 教育課程の再編

習熟度別指導をシステム化する一方で、教育課程全体の見直しを行い、基礎・基本をより一層定着させるための校内体制を確立する。

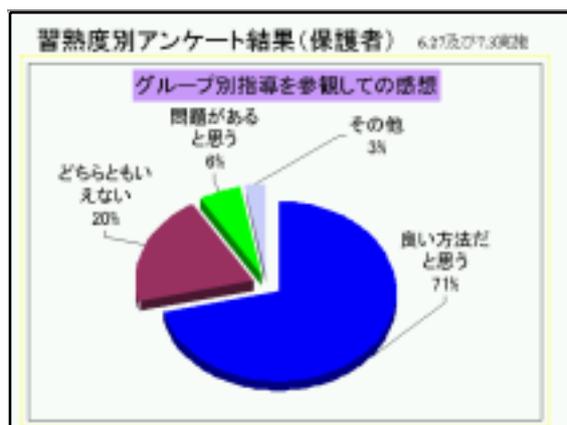
- (1) スキルタイムの設定 (週5回×10分間)
- (2) 国語、算数の「基礎・基本の手引き」を作成し、基礎・基本の徹底を図る。
- (3) 朝の打合せをなくし、週1回夕方に持つ。朝会・集会は木曜日の5校時に設定。
- (4) 「算数のあゆみ」を年3回長期休み前に発行し、休み中の家庭での学習の継続と習慣化を図る。

### 3. 指導効果を上げるための手立て

- (1) 児童への指導  
児童に優劣意識を持たせないようにするため、年度初めに学年全体でガイダンスを実施し、本来のねらいや趣旨を再確認する。児童の意識調査を実施し、問題点や課題を洗い出し、事後の指導に生かす。
- (2) 保護者の理解と協力を得るために  
年度末懇談会、年度初めのPTA総会で、校長よりその趣旨、方向性について直接説明をする。また、その後の様々な調査結果や児童の変容等の情報を、学校だよりやホームページで、随時提供していく。研究授業の保護者公開、自由参観を通じ、指導の実際を参観してもらう。アンケートを実施し、習熟度別指導に対する保護者の意識調査を行う。



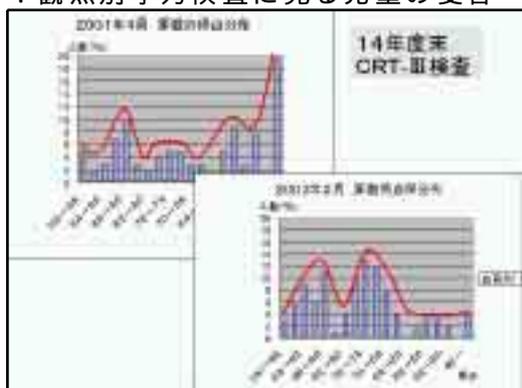
(図2) 児童の意識調査結果



(図3) 保護者の意識調査結果

(4) ボランティアティーチャーの導入  
算数の苦手な子のグループをより少人数化したことで、グループ間に人数的な偏りが生じた。そこで、保護者ボランティアティーチャーを募集し、担任の補助的活動をしてもらうことで、できるだけ個別に対応できる工夫をした。

#### 4. 観点別学力検査に見る児童の変容



(図4) 2001年と2003年のCRT検査結果の比較

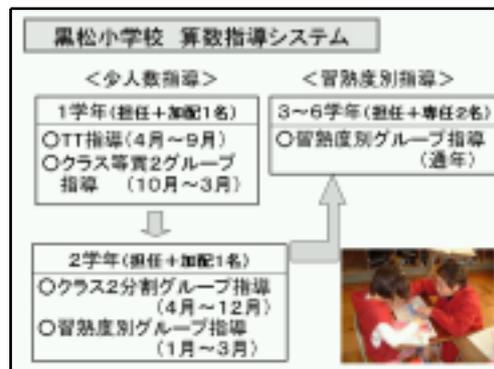
2003年には、どの学年も全国平均を上回り、基礎学力を向上させることができた。

また、同じ時期に実施した児童の意識調査では、「自分の力を伸ばそうと努力した」「むずかしい問題でもあきらめないで解くようになった」など根気強さや粘り強さが育ってきていることがわかった。

平成15年度(充実期)

#### 1. 全校システム化

3学年からの習熟度別グループ指導体制に移行させるために1・2学年での取り組みをどうするかが、前年度からの課題であった。今年度は、2学年への加配教員が配置されたことで、下記のような6学年にわたる算数の指導体制をシステム化することができた。



(図5) 本校における算数指導システム

#### 2. 授業改善に向けた取り組み

習熟度別グループ指導の効果をより高めるためには、1時間1時間の授業の質を高めていくことが何より大切である。

そこで、今年度は研究組織をこれまでの学年単位から、グループ単位の組織へと変更し、それぞれの子供の実態に即した授業づくりや指導法の研究を進めている。

加えて6学年においては、新たに教科担任制を導入し、教師の専門性や得意分野を生かした授業の展開と、児童にとってより興味・関心もてる授業づくりに取り組んでいる。

おわりに

これまで述べてきたように、本校において習熟度別グループ指導が導入できた最大の要因は、「まずやってみよう」と1年間の試行期間を設けたことである。

各学年ごと様々に試行しながら、実践上の課題や問題点を出し合い、指導効果が得られる、よりよい方法をお互いに模索する中で、習熟度別指導の良さや効果に気づき、自然に移行することができた。

このシステムを導入して今年で2年目となるが、教師がきちんと手順を踏み、細かな配慮を行ってきたことで、心配された児童の優劣意識の問題も起きていない。

また、意識調査からは児童や保護者がこのような指導形態を肯定的に受け止めていることも分かった。

子供の学習意欲の向上やCRTの検査結果が示すように、学力差の大きい実態の中では大変有効な手立ての1つであるといえる。

今後もシステムの改善を図りながら、学力保証という学校本来の役割を十分に果たし、保護者の期待と信頼に応えていきたい。